

第32回平和祈念コンサート 講演会

【加藤順康氏】 ただいまご紹介いただきました加藤でございます。

大変お聞き苦しい点もあろうかと思いますが、何卒、15分か20分くらいお付き合いくださいませ。

私自身は、昭和23年に、練馬区の現在の土地に住んでおりまして、もう70年、80年ぐらいの話でございます。当時、練馬区は畑も多く、歩いていると富士山がよく見えました。

この敷地は、カネボウの工場がございまして、私は毎朝通学するときに、いつも眺めておりました。戦後は、賠償指定工場ということになっておったようでございます。

それから、私自身は、鷺宮小学校という隣の区の小学校を出ておりますが、鷺宮1丁目から6丁目まで全部カバーする小学校でございまして、2部授業でございました。

東両国の件について申し上げます。

私自身は、昭和13年12月2日に回向院の 回向院って両国でございますけれども、回向院の境内で生まれました。父が徴兵制度を考慮して、一月送らせて、14年の1月2日と届け出ました。

当時の徴兵制度は年単位で行われたものですから、その年その年ということで、1年これで余裕ができたわけです。

大空襲の年は昭和20年3月10日でございますけれども、私自身は6歳でございます。6歳で、あと3週間で小学校に入る年でございます。

現在は85歳 6歳に向かっているところでございます。

家は回向院の敷地で、丸い鉄骨造りの国技館がありまして、相撲の他、サーカスなんかをやっておりました。

境内には力塚とかねずみ小僧の墓があって、お祭りや、お寺の催し物などに使用されておりました。

近所には相撲関係の建物が多くて、相撲部屋の力士さん、行司さん、お茶屋さんなどが住んでおりました。私どもの裏には行司さんが住んでおりました。

そして、この辺の道は非常に狭く入りこんでおり、それだけに隣組を中心とした交流が非常に濃いものでございました。

戦争末期には、国技館が、米軍本土攻撃用の風船爆弾を作る工場となって、外には大きな木の箱なんか重なっておりまして、私ども子供には、かくれんぼなどをするのに絶好の場所でもございました。

自宅1階には父の仕事場があり、相撲の時期には軍服姿の将校さんたちが鍋を囲んで楽しそうに談笑しておりました。

父は、区役所が燃えて、自分が届け出た登記簿がなくなってしまったので、徴兵を受けなかったという話でございます。

この近くに田無という場所がございますけど、田無に戦車部隊がありまして、私は戦車隊へ連れてっていただいて、乗せていただいたことがあります。

それから、戦争が進んでから「頑張りましょう、勝つまでは」という標語の下で、全てが統制されました。

食料が一番逼迫して、本当に食べるものがなくて非常に困っておりました。私どもは、サツマイモが主体で出されていましたが、ふすまというのは小麦の表面部分ですが、それを丸めて、すいとんというのを作っておりまして、また、うどんを細かく切って米みたいにして、代用食を作っておりました。

父は建築家だったので、区役所からの要請を受けて、勤労働員された学生たち

を指揮して、火災が起きますと類焼するものですから、それを避けるべく建物の取り壊し作業をしておりました。

3月10日の、当日の大空襲の話进行いたします。

当日は陸軍記念日でした。前夜に米軍の偵察機が来て、それから、その後すぐ、10日になるのですが、10日の未明からB29による爆撃が始まります。

米軍はソロモン諸島を手に入れて、これはグアムとかサイパンとか、今で言えば避暑地になるのですが、そこを手に入れて焼夷爆弾をいっぱい積んだB29爆撃機三百機による、下町への空襲がございました。

それまでも何度か空襲を受けておりましたけれども、一番怖かったのは時限爆弾でございました。

時々、夜中にボスンボスンと音がして、時限爆弾が破裂するので非常に怖かったです。ラジオの警戒警報で、今夜の空襲は大きいということを盛んに言っております、そのうち下町の墨田、江東、台東区、中央区の方面が攻撃目標になりました。

これまでの空襲は軍事産業に対するものだったのですけれども、ことに立川にあった中島飛行機に対する攻撃が非常に大きく取り上げられておりました。この日は無抵抗な住民に対する組織的な大量殺戮でございました。2時間程度の爆撃で、死亡者は10万人に上りました。

原爆のことは皆さんよくご存知だと思いますけれども、同規模の被害が2時間程度で起こったわけです。

この間、米軍の飛行機に対する攻撃や対空火砲などは一切ありませんでした。少なくともそう見受けられました。

一方、政府は、居住者に対して、東京が空にならないよう、田舎への移住禁止令を出しておりました。田舎に親戚のあった人たちは、早めに家財道具や何かを

疎開して難を避けましたが、私どもは、ちょうど今のところに家を造っておりまして、全て焼かれてしまいました。

この被害に対する国家ないしは公共機関からの賠償というのは全くありませんでした。みんなやられた、それだけの話です。

その日はとても寒くて風の強い夜でした。夜中に兄貴と弟が起こされ、私も一緒に、兄弟3人でございましたけど、3人が起こされて、外側では警報がけたたましく鳴っており、真っ赤な空ばかりでございました。

今度の空襲はとても大きくて、一家全滅の危機があると親父が言って、親父は兄と、それから、母は、私は6歳でございまして、私と、2歳の弟を背中に背負って、二手に分かれて逃げ回りました。

本当は、二手に分かれるよりも、一緒になって逃げるはずでございましたけれども、みんなが死んだら誰が後始末をするのかということが、親父の言葉でした。

親父は回向院の鐘撞堂付近の防空壕や市街地、母は私どもを連れて隅田川沿いのところで空襲をやり過ごしたようでございます。

空にはB29が来ておりまして、次から次へと、今の門前仲町、富岡八幡あたりから、その辺で爆弾を落として、恐らく爆弾を落とした後に我々の上を通過していったのだと思います。

火災と乾燥で、川幅が約200mある隅田川を越えて火の粉が飛んできました。

下町というのは大体2階なのですが、3階に干物の乾かす場所がありました。あっという間にそこに火が200mぐらい先の方から火の玉が飛んできて、そういう洗濯物干し場に落ちて、すぐ発火して、家も類焼いたしました。

消防自動車は来たのですけれども、消防自動車は自分の車を守るために手一杯で、逃げ惑うだけでした。何のための消防自動車かと思いました。

空襲は2時間程度で終わったようでございます。

これは、空襲のあとで後ろ方の建物は両国駅でございます。今でも両国駅はこのまま使っております。

両国駅の前で、駅前に工藤写真館という写真屋さんがありまして、その親父がライカで撮った写真でございます。よく見えませんが、戦争中は胸に名前と、住所と血液型を示して貼り付けて、それでどういうところにいたのかというふうに分かるようになっておりました。

写真は残っていた隣組の連中でございますけれども、こういう写真は珍しいのだそうです。

景色とかそういうものは撮られているようですが、こういう隣組で撮ったような写真はなかったそうです。

前の右から3番目、あれが親父でございます。それから後ろ方の4番目、右から4番目は母親でございます。母親は背中に弟も背負っていました。

私と兄貴はこの写真には載っておりませんが、両国の公会堂が開いて、そこで私どもは寝入ったようでございます。

私のお話は大体おしまいでございます、私どもの親父の兄貴が田村町におりましたので、田村町から叔父が駆けつけて、それで我々のことを拾っていったというのが、当時の状況でございます。

私のお話は大体それでおしまいでございます。その後、我々は、集団疎開に行きますが、そのお話は止めておきます。

大体、時間的に以上でおしまいいたします。どうも色々ご清聴ありがとうございました。

それから、終わりの言葉として、日本は明治維新後約160年になりますけれども、前半80年というのは、色々な戦争がありました。

後半80年というのは戦後でございますけれども、戦争はなかったです。平和な

時代だったのです。

私どもは、この戦争のない時代に生きていたことを改めて認識すべきかと思
います。

以上でございます。どうもありがとうございました。